

白拍子は鈴の鳴るような声で謡う。

「遊びをせんやと生まれけむ 戯れせんやとや生まれけむ 遊ぶ子どもの声聞けば 我が身さえこそ動がるれ」  
謡いながら、白拍子は、扇で優美に舞った。

白い小袖に白い袴……。

その上に半透明の水干を纏っている。

頭には立烏帽子……そこから長い髪を後ろに垂らしている。

その姿は、ヒラヒラと飛ぶ白い蝶のようだ。

「舞え舞え 蝸牛 舞はぬ物ならば 馬の子牛の子に蹴させてん 踏破せてん 真に美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん」

舞いが終わった……。

終わった途端、白拍子は、疲れたあゝと声を上げ、へたへたと床の上に座り込んだ。

思わず、皆がドツと笑った。

そして、一斉に拍手をする。

「こら、希代 そんな格好で座るな……はやく、着替えてこい」

清次が、声を荒げた……。

安珍は、その言葉で、今まで踊っていた白拍子が、清姫だと気が付いた。

「はいはい、おにい様……こんな肩の凝るような格好……窮屈でたまらない。」

と……その場で脱ごうとする。

「ばか者！向こうで着替えろ！」

清次は怒鳴りつける。

「全く……希代の奴は……。」

清次の呆れた視線が、あつかんべをしながら部屋を出て行く清姫の姿を追いかける。

「だけど、うまいもんだらう？……あれで、もう少し、色っぽくなればいいのだがな……。」……と安珍に話しかける。  
その口調が、少し、自慢気だ。

しばらくして、清姫は着替えて戻って来た。

チンチクリンの蜜柑色の単衣を簡単に細い帯で縛り、髪の毛を、ほつれ毛をそのままに、くるりと根元の方で縛ってある。  
さつきとは、うってかわった子どもっぽい装束だ。

並んだ皿から、サルナシの実をつかみ、清重の前に行つて、その膝の上に、ちょこなんと座り込む……。